

講義第12回 (6/12) : 3変数の微分積分

配布日：6/12/2020 Version : 1.1

●● 6月12日の講義内課題 ●●

3変数関数の偏微分

問題 12-1. (全微分) xyz 空間 \mathbb{R}^3 上の関数 $f(x, y, z)$ が点 (a, b, c) において全微分可能であることの定義を書け。

問題 12-2. (偏微分) x, y, z を変数とする次の関数の偏導関数を求めよ。

$$(1) f(x, y, z) = xyz$$

$$(2) f(x, y, z) = \frac{1}{\sqrt{x^2 + y^2 + z^2}}$$

3変数関数の積分

問題 12-3. (累次積分) 以下は左辺の重積分を累次積分に書き直したものである。閉領域 D を集合の形で表し、さらに積分の値を計算せよ。

$$(1) \iiint_D (x + y + z) dx dy dz = \int_0^1 dx \int_0^2 dy \int_{-1}^1 (x + y + z) dz$$

$$(2) \iiint_D z dx dy dz = \int_0^1 dx \int_0^{x+1} dy \int_0^{x+y} z dz$$

問題 12-4. (有界集合の体積) \mathbb{R}^3 内の集合 K の体積の定義を述べよ。

問題 12-5. (ヤコビアン) 以下の C^1 級関数 $x = x(u, v, w)$, $y = y(u, v, w)$, $z = z(u, v, w)$ が定める変数変換のヤコビアンを書け。

$$(1) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} u + v + w \\ uv + vw + wu \\ uvw \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} u \cos v \\ u \sin v \\ w \end{pmatrix}$$

問題 12-6. (極座標変換) 3次元の極座標変換

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \Phi \begin{pmatrix} r \\ \theta \\ \phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r \sin \theta \cos \phi \\ r \sin \theta \sin \phi \\ r \cos \theta \end{pmatrix}$$

(そのヤコビアンは $r^2 \sin \theta$ である) を用いて、閉領域 $D = \{(x, y, z) \mid x^2 + y^2 + z^2 \leq R^2\}$ 上の積分 $\iiint_D \sqrt{x^2 + y^2 + z^2} dx dy dz$ の値を求めよ。(答. πR^4)

担当教員：川平 友規

●● 6月12日の講義ノート ●●

参考書の該当箇所：[川平] なし [三宅] なし

内積と外積

まず空間ベクトルの内積と、3次元ベクトル特有の積である、「外積」の性質をまとめておく。

定義 (内積と外積) 空間ベクトル

$$\vec{a} = (a_1, a_2, a_3), \quad \vec{b} = (b_1, b_2, b_3)$$

に対し、以下のように定める：

- \vec{a} と \vec{b} の内積：

$$\vec{a} \cdot \vec{b} := a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3$$

- \vec{a} の長さ：

$$|\vec{a}| := \sqrt{\vec{a} \cdot \vec{a}} = \sqrt{a_1^2 + a_2^2 + a_3^2}$$

- \vec{a} の外積：

$$\vec{a} \times \vec{b} = (a_2b_3 - a_3b_2, a_3b_1 - a_1b_3, a_1b_2 - a_2b_1)$$

例題 12.1 (内積と外積の性質) $\vec{0}$ でないベクトル \vec{a} と \vec{b} の内積と外積について、以下の性質を示せ。ただし、 θ ($0 \leq \theta \leq \pi$) は \vec{a} と \vec{b} のなす角度とする。

$$(1) \vec{a} \cdot \vec{b} = |\vec{a}| |\vec{b}| \cos \theta.$$

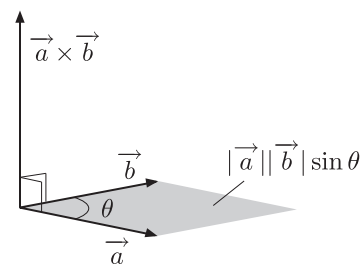
$$(2) |\vec{a} \times \vec{b}| = |\vec{a}| |\vec{b}| \sin \theta. \text{ とくに、この値は } \vec{0}, \vec{a}, \vec{b}, \vec{a} + \vec{b} \text{ を頂点にもつ平行四辺形の面積に等しい.}$$

$$(3) \vec{a}, \vec{b} \neq \vec{0} \text{ のとき、外積 } \vec{a} \times \vec{b} \text{ は } \vec{a} \text{ と } \vec{b} \text{ の両方に垂直.}$$

解答のスケッチ (1) は平面ベクトルと同様。(余弦定理 $|\vec{a}|$ を用いる。高校の教科書を参照。)

(2) は次の式変形による：

$$\begin{aligned} & |\vec{a} \times \vec{b}|^2 \\ &= (a_2b_3 - a_3b_2)^2 + (a_3b_1 - a_1b_3)^2 + (a_1b_2 - a_2b_1)^2 \\ &= (a_1^2 + a_2^2 + a_3^2)(b_1^2 + b_2^2 + b_3^2) - (a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3)^2 \\ &= |\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 - (\vec{a} \cdot \vec{b})^2 \\ &= |\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 \left(1 - \frac{(\vec{a} \cdot \vec{b})^2}{|\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2} \right) \\ &= |\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 (1 - \cos^2 \theta) \\ &= |\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 \sin^2 \theta. \end{aligned}$$



担当教員：川平 友規

(3) $\vec{a} \cdot (\vec{a} \times \vec{b})$ と $\vec{b} \cdot (\vec{a} \times \vec{b})$ を定義どおりに成分の値を用いて計算すると、ともに 0 となることが確認できる。 ■

命題 12.1 (内積一定の集合) 空間ベクトル $\vec{A} \neq \vec{0}$ と垂直な平面で \vec{a} を通るものは

$$\{ \vec{x} \in \mathbb{R}^3 \mid \vec{A} \cdot \vec{x} = \vec{A} \cdot \vec{a} \}$$

と表される。また、すべての実数 k に対し、集合

$$E_k = \{ \vec{x} \in \mathbb{R}^3 \mid \vec{A} \cdot \vec{x} = k \}$$

は \vec{A} に垂直な平面である。

証明. $\vec{x} \neq \vec{a}$ がそのような平面にあることの必要十分条件は、 $\vec{A} \perp (\vec{x} - \vec{a})$ 。よって $\vec{A} \cdot (\vec{x} - \vec{a}) = 0$ であればよい。

また、与えられた実数 k に対し、 $\vec{a}_k := k\vec{A}/|\vec{A}|^2$ と定めると、 $k = \vec{A} \cdot \vec{a}_k$ を満たす。よって $E_k = \{ \vec{x} \in \mathbb{R}^3 \mid \vec{A} \cdot \vec{x} = \vec{A} \cdot \vec{a}_k \}$ と表される。 ■

全微分と偏微分

以下、3変数関数 $y = f(x_1, x_2, x_3)$ を考える¹。以下、表記を簡単にするために、ベクトル変数 $\vec{x} = (x_1, x_2, x_3)$ を用いて $y = f(\vec{x})$ と表すことにする。

連続性. まずは関数の連続性を定義する。

定義 (関数の極限と連続性) 関数 $y = f(\vec{x})$ とベクトル \vec{a} に対し、 $|\vec{x} - \vec{a}|$ が限りなく 0 に近づくとき、 $f(\vec{x})$ がある定数 A に限りなく近づくものとする。このとき、 $f(\vec{x})$ は $\vec{x} \rightarrow \vec{a}$ のとき A に収束するといひ、

$$\lim_{\vec{x} \rightarrow \vec{a}} f(\vec{x}) = A \quad \text{または} \quad f(\vec{x}) \rightarrow A \quad (\vec{x} \rightarrow \vec{a})$$

と表す。また、 $f(\vec{x}) \rightarrow f(\vec{a})$ ($\vec{x} \rightarrow \vec{a}$) が成り立つとき、関数 $f(\vec{x})$ は \vec{a} において連続であるという。

全微分可能性. 関数が「全微分可能」であるとは、1次関数で近似できることであつた。 $\vec{A} = (A_1, A_2, A_3)$ をベクトル定数、 B を実数の定数とすると、3変数関数の1次関数は

$$y = A_1x_1 + A_2x_2 + A_3x_3 + B = \vec{A} \cdot \vec{x} + B$$

の形となる。また、ランダウの記号を次のように拡張しておく：少なくとも関数 \vec{a} を含む領域上で定義された関数 $E(\vec{x})$ が のとき $\frac{E(\vec{x})}{|\vec{x} - \vec{a}|} \rightarrow 0$ ($\vec{x} \rightarrow \vec{a}$) を満たすとき、

$$E(\vec{x}) = o(\vec{x} - \vec{a}) \quad (\vec{x} \rightarrow \vec{a})$$

と表す。これらを用いて、全微分可能性を次のように定義する：

¹もちろん $w = f(x, y, z)$ のように表してもよいが、こちらのほうが n 変数の場合を類推しやすい。

担当教員: 川平 友規

定義 (関数の全微分可能性) 関数 $y = f(\vec{x})$ が \vec{a} において全微分可能であるとは、あるベクトル定数 \vec{A} が存在して、 $|\vec{x} - \vec{a}| \rightarrow 0$ のとき

$$f(\vec{x}) = f(\vec{a}) + \vec{A} \cdot (\vec{x} - \vec{a}) + o(|\vec{x} - \vec{a}|) \quad (12.1)$$

と表されることをいう。このとき、ベクトル \vec{A} を関数 $y = f(\vec{x})$ の勾配ベクトルとよび、 $\vec{A} = \nabla f(\vec{a})$ と表す。

例題 12.2 (全微分可能性) 関数 $w = f(x, y, z) = xyz$ は $(1, -1, 2)$ で全微分可能であることを示せ。また、この点での勾配ベクトルを求めよ。

解答. $\Delta x = x - 1$, $\Delta y = y + 1$, $\Delta z = z - 2$ とおくと、

$$\begin{aligned} f(x, y, z) &= (1 + \Delta x)(-1 + \Delta y)(2 + \Delta z) \\ &= -2 - 2\Delta x + 2\Delta y - \Delta z + 2\Delta x\Delta y + \Delta y\Delta z - \Delta z\Delta x + \Delta x\Delta y\Delta z \\ &= f(1, -1, 2) + \begin{pmatrix} -2 \\ 2 \\ -1 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} \Delta x \\ \Delta y \\ \Delta z \end{pmatrix} + o(\sqrt{\Delta x^2 + \Delta y^2 + \Delta z^2}). \end{aligned}$$

ただし、下線部の計算では $|\Delta x|, |\Delta y|, |\Delta z|$ がそれぞれ $\sqrt{\Delta x^2 + \Delta y^2 + \Delta z^2}$ よりも小さいことを用いた。これをベクトルの記号に直せば式 (12.1) の形となるので、全微分可能である。とくに、勾配ベクトルは $(-2, 2, -1)$ 。

定義 (関数の偏微分可能性) 関数 $y = f(\vec{x}) = f(x_1, x_2, x_3)$ が $\vec{a} = (a_1, a_2, a_3)$ において偏微分可能であるとは、各 $k = 1, 2, 3$ に対し極限

$$\begin{aligned} \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a_1 + h, a_2, a_3) - f(a_1, a_2, a_3)}{h} &= A_1, \\ \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a_1, a_2 + h, a_3) - f(a_1, a_2, a_3)}{h} &= A_2, \\ \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a_1, a_2, a_3 + h) - f(a_1, a_2, a_3)}{h} &= A_3 \end{aligned}$$

がそれぞれ存在することをいう。 A_k はそれぞれ (x_k に関する) 偏微分係数とよばれる。また、関数 $y = f(\vec{x})$ が定義域上の各点で偏微分可能であるとき、各 \vec{x} に x_k に関する偏微分係数を対応させる関数を $y = f(\vec{x})$ の x_k に関する偏導関数とよび、 $\frac{\partial y}{\partial x_k}$, y_{x_k} , $f_{x_k}(\vec{x})$, $f_{x_k}(x_1, x_2, x_3)$, $\frac{\partial f}{\partial x_k}(\vec{x})$, $\frac{\partial f}{\partial x_k}(x_1, x_2, x_3)$ などと表される。

「 n 階偏導関数」, 「 C^n 級関数」も 2 変数関数の場合と同様に定義される。

例題 12.3 (全微分可能性と連続性・偏微分可能性) 関数 $y = f(\vec{x})$ がある点 \vec{a} で全微分可能であれば、連続であり、偏微分可能でもあることを示せ。とくに、勾配ベクトルは

$$\nabla f(\vec{a}) = (f_{x_1}(\vec{a}), f_{x_2}(\vec{a}), f_{x_3}(\vec{a})) \quad (12.2)$$

と表されることを示せ。

担当教員：川平 友規

解答. 式(12.1)より明らかに $\vec{x} \rightarrow \vec{a}$ のとき $f(\vec{x}) \rightarrow f(\vec{a})$. よって連続である. また, $\vec{x} = \vec{a} + (h, 0, 0)$ として $h \rightarrow 0$ とすれば, $f(\vec{x}) - f(\vec{a}) = A_1 h + o(h)$ となる. これは $f_{x_1}(\vec{a}) = A_1$ を意味する. 他の成分も同様である. $\nabla f(\vec{a}) = (A_1, A_2, A_3)$ より勾配ベクトルの表現を得る. ■

次の事実も2変数の場合と同様である (証明略)

定理 12.2 (C^1 級関数と全微分可能性, 偏微分の順序交換) 関数 $y = f(\vec{x})$ が定義域上で C^1 級であれば, 全微分可能である. また, C^2 級であれば2階偏導関数について偏微分の順序を交換してよい. すなわち, $f_{x_1 x_2} = f_{x_2 x_1}$ 等が成り立つ.

以下では話を簡単にするため, 扱う関数は C^∞ 級であり, すべて好きなだけ微分 (偏微分) できるものとしよう.

例題 12.4 (合成関数の微分) 曲線 $\vec{x} = \vec{x}(t)$ に対し, 関数 $y = f(\vec{x})$ との合成関数 $F(t) = f(\vec{x}(t))$ の微分は勾配ベクトルと速度ベクトルの内積

$$F'(t) = \nabla f(\vec{x}(t)) \cdot \vec{x}'(t)$$

で与えられることを示せ: ただしダッシュ (') は t による微分 $\frac{d}{dt}$ を表す.

解答のスケッチ. $t \rightarrow t_0$ のとき $\vec{x}(t) = \vec{x}(t_0) + \vec{x}'(t_0)(t - t_0) + \vec{E}(t)$ (ただし $\vec{E}(t)$ の各成分は $o(|t - t_0|)$) と表される. 式(12.1)より $\vec{x}(t) \rightarrow \vec{x}(t_0)$ のとき

$$\begin{aligned} f(\vec{x}(t)) - f(\vec{x}(t_0)) &= \nabla f(\vec{x}(t_0)) \cdot (\vec{x}(t) - \vec{x}(t_0)) + o(|\vec{x}(t) - \vec{x}(t_0)|) \\ &= \nabla f \cdot (\vec{x}(t_0)) \cdot \vec{x}'(t_0)(t - t_0) + o(|t - t_0|). \end{aligned}$$

これは題意の等式を意味する. ■

3 重積分

xyz 空間の直方体

$$D := \{(x, y, z) \mid a_1 \leq x \leq b_1, a_2 \leq y \leq b_2, a_3 \leq z \leq b_3\}$$

を3次元の**区画**とよび, 記号 $[a_1, b_1] \times [a_2, b_2] \times [a_3, b_3]$ で表すことにする. このような区画上の関数 $w = f(x, y, z)$ について, 積分を考えよう.

アイディアは2変数の場合と同様である.

- 区間 $[a_1, b_1]$ を l 分割する点 $a_1 = x_0 < x_1 < \dots < x_l = b_1$,
- 区間 $[a_2, b_2]$ を m 分割する点 $a_2 = y_0 < y_1 < \dots < y_m = b_2$,
- 区間 $[a_3, b_3]$ を n 分割する点 $a_3 = z_0 < z_1 < \dots < z_n = b_3$,

を選び, 計 lmn 個の小区画

$$D_{ijk} := [x_i, x_{i+1}] \times [y_j, y_{j+1}] \times [z_k, z_{k+1}]$$

から代表点 $(x_{ijk}^*, y_{ijk}^*, z_{ijk}^*)$ を選び, **リーマン和**

$$\sum_{i,j,k} f(x_{ijk}^*, y_{ijk}^*, z_{ijk}^*) (x_i - x_{i-1})(y_j - y_{j-1})(z_k - z_{k-1})$$

担当教員：川平 友規

(ただし $1 \leq i \leq l-1$, $1 \leq j \leq m-1$, $1 \leq k \leq n-1$) を考える. 各区間の分割の最大幅が 0 に近づくように分割点を増やしていくとき, (分割点や代表点の取り方に依存せず) ある実数 I が存在してリーマン和が I に近づくならば, 関数 $f(x, y, z)$ は区画 D 上で**積分可能**であるといい,

$$I = \iiint_D f(x, y, z) dx dy dz$$

と表す.

実際の計算には, たとえば次の公式が使える:

定理 12.3 (3変数の累次積分) 関数 $f(x, y, z)$ が区画 $D = [a_1, b_1] \times [a_2, b_2] \times [a_3, b_3]$ 上で連続であれば積分可能であり, 次の等式が成り立つ:

$$\iiint_D f(x, y, z) dx dy dz = \int_{a_1}^{b_1} \left(\int_{a_2}^{b_2} \left(\int_{a_3}^{b_3} f(x, y, z) dz \right) dy \right) dx$$

右辺を**累次積分**とよぶ. この定理の条件下では, 積分の順序を交換してもよい.

例題 12.5 (3重積分の計算) $D = [0, a] \times [0, b] \times [0, c]$ とするとき,

$\iiint_D (x + y + z) dx dy dz$ を求めよ.

解答. 定理 12.3 より,

$$\begin{aligned} \iiint_D (x + y + z) dx dy dz &= \int_0^a \left(\int_0^b \left(\int_0^c (x + y + z) dz \right) dy \right) dx \\ &= \int_0^a \left(\int_0^b \left[(x + y)z + \frac{z^2}{2} \right]_0^c dy \right) dx \\ &= \int_0^a \left(\int_0^b \left(cx + cy + \frac{c^2}{2} \right) dy \right) dx \\ &= \int_0^a \left[cxy + \frac{cy^2}{2} + \frac{c^2y}{2} \right]_0^b dx \\ &= \int_0^a \left(bcx + \frac{b^2c}{2} + \frac{bc^2}{2} \right) dx \\ &= \left[\frac{bcx^2}{2} + \frac{bc(b+c)x}{2} \right]_0^a \\ &= \frac{abc}{2}(a + b + c). \end{aligned}$$

区画以外の積分. 関数 $f(x, y, z)$ の定義域 D が区画でない有界閉領域であるとき, D を含む区画 \tilde{D} をとり, D の外側では関数 $f(x, y, z) = 0$ とおくことで, 関数 $f(x, y, z)$ を区画 \tilde{D} 上の関数とすることができる. そのような関数が区画 \tilde{D} 上で積分可能であるとき, $f(x, y, z)$ は D 上の積分可能であるとみなし, $\iiint_D f(x, y, z) dx dy dz := \iiint_{\tilde{D}} f(x, y, z) dx dy dz$ として定義する.

例題 12.6 (区画以外での3重積分) $D = \{(x, y, z) \mid x, y, z \geq 0, x + y + z \leq \pi\}$ とするとき, $\iiint_D \sin(x + y + z) dx dy dz$ を求めよ.

解答. 2変数の場合と同様に, 累次積分に置き換えて計算する.

$$\begin{aligned} \iiint_D \sin(x+y+z) \, dx dy dz &= \int_0^\pi \left(\int_0^{\pi-x} \left(\int_0^{\pi-x-y} \sin(x+y+z) \, dz \right) dy \right) dx \\ &= \int_0^\pi \left(\int_0^{\pi-x} \left[-\cos(x+y+z) \right]_0^{\pi-x-y} dy \right) dx \\ &= \int_0^\pi \left(\int_0^{\pi-x} (1 - \cos(x+y)) dy \right) dx \\ &= \int_0^\pi \left[1 + -\cos(x+y) \right]_0^{\pi-x} dx \\ &= \int_0^\pi (\pi - x - \sin x) dx = \frac{\pi^2}{2} - 2 \end{aligned}$$

体積の定式化. 「面積」の概念と同様に, 「体積」も重積分を用いることで定式化できる.

定義 (空間内の集合の体積) \mathbb{R}^3 内の集合 D に対し定数関数 $f(x, y, z) = 1$ が D 上で積分可能であるとき D は**体積確定**であるといい, その**体積**を $\text{Vol}(D) := \iiint_D dx dy dz$ で定める.

前回, 2変数関数の「グラフに囲まれる部分の体積」を重積分で定義した. 次の公式は, それを正当化するものである (証明略):

定理 12.4 (曲面ではさまれた部分の体積) xy 平面上の領域 D 上の連続関数 $\phi_1(x, y)$ と $\phi_2(x, y)$ が $\phi_1(x, y) \geq \phi_2(x, y)$ を満たすとき, それらの3次元グラフで囲まれる部分

$$K = \{(x, y, z) \mid (x, y) \in D, \phi_1(x, y) \leq z \leq \phi_2(x, y)\}$$

の体積は

$$\text{Vol}(K) = \iint_D \{\phi_2(x, y) - \phi_1(x, y)\} \, dx dy$$

で与えられる.

変数変換とヤコビアン

変数 x, y, z がそれぞれ変数 u, v, w の C^1 級関数であるとき, 変数変換 $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \Phi \begin{pmatrix} u \\ v \\ w \end{pmatrix} =$

$\begin{pmatrix} x(u, v, w) \\ y(u, v, w) \\ z(u, v, w) \end{pmatrix}$ を考えることができる.

このとき, 変数 u, v, w の C^1 級関数

$$\frac{\partial(x, y, z)}{\partial(u, v, w)} := x_u y_v z_w + x_v y_w z_u + x_w y_u z_v - x_w y_v z_u - x_v y_u z_w - x_u y_w z_v$$

担当教員：川平 友規

をヤコビアンとよぶ²。2変数の場合と同様に、 C^1 級の変数変換は局所的に「ヤコビ行列による1次変換」によって近似される。また、ヤコビアン³の絶対値はその1次変換による「局所的な体積の拡大率」となる。

積分に関しては、次の公式が成り立つ (証明略)：

定理 12.5 (3変数関数の積分の変数変換) 変数変換 $(x, y, z) = \Phi(u, v, w)$ によって領域 E が領域 D に対応するとき、

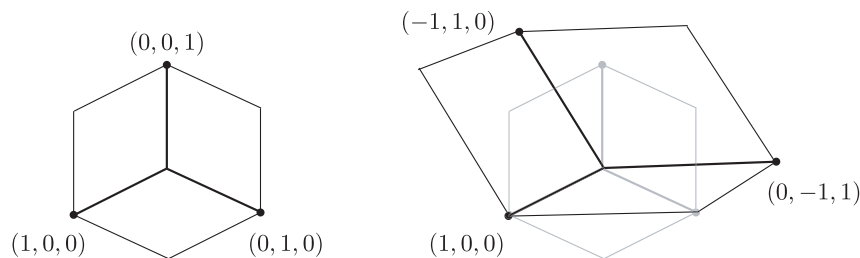
$$\iiint_D f(x, y, z) \, dx dy dz = \iiint_E f(\Phi(u, v, w)) \left| \frac{\partial(x, y, z)}{\partial(u, v, w)} \right| \, du dv dw.$$

例題 12.7 (1次変換) $D = \{(x, y, z) \mid 0 \leq x + y + z \leq 1, 0 \leq y + z \leq 1, 0 \leq z \leq 1\}$ で表される平行6面体の体積を求めよ。

解答. $\text{Vol}(D) = \iiint_D dx dy dz$ を計算すればよい。 $u = x + y + z, v = y + z, w = z$ とおくと、変数変換 $(x, y, z) = \Phi(u, v, w) = (u - v, v - w, w)$ が定まる³。このとき、ヤコビアンは $\frac{\partial(x, y, z)}{\partial(u, v, w)} = 1$ (定数関数) であり、 Φ は区画 $E = [0, 1] \times [0, 1] \times [0, 1]$ を D に写すので、求める体積は

$$\begin{aligned} \text{Vol}(K) &= \iiint_D 1 \cdot dx dy dz = \iiint_E 1 \cdot |1| \, du dv dw \\ &= \int_0^1 \left(\int_0^1 \left(\int_0^1 1 \cdot dw \right) dv \right) du \\ &= 1. \end{aligned}$$

注意 (Dの形)。この平行6面体 D が実際にどのような形をしているのか、式から想像するのは意外と難しい。線形代数で学ぶ「1次変換」の考え方に慣れていれば、 E のヤコビ行列 $D\Phi$ による像としてある程度の形がわかる。具体的にいえば、 D とはベクトル $(1, 0, 0), (-1, 1, 0), (0, -1, 1)$ によって張られる平行6面体である。



²行列 $D\Phi = \begin{pmatrix} x_u & x_v & x_w \\ y_u & y_v & y_w \\ z_u & z_v & z_w \end{pmatrix}$ をヤコビ行列とよび、ヤコビアンとはその行列式 $\det D\Phi$ として定義される。行列や行列式について、詳しくは線形代数で学ぶ。

³このときヤコビ行列は $D\Phi = \begin{pmatrix} 1 & -1 & 0 \\ 0 & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ 。

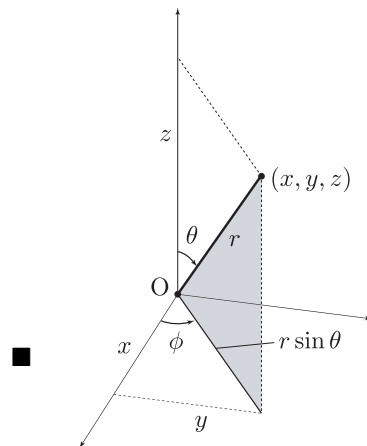
例題 12.8 (空間の極座標変換) 空間の座標変換

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \Phi \begin{pmatrix} r \\ \theta \\ \phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r \sin \theta \cos \phi \\ r \sin \theta \sin \phi \\ r \cos \theta \end{pmatrix}$$

を用いて、半径 $R > 0$ の球体の体積を求めよ。

解答. $D = \{(x, y, z) \mid x^2 + y^2 + z^2 \leq R^2\}$ の体積は $\text{Vol}(D) = \iiint_D dx dy dz$ で与えられる. 空間の極座標変換により, $r\theta\phi$ 空間の区画 $E = [0, R] \times [0, \pi] \times [0, 2\pi]$ が D に写る. このとき, ヤコビアンは $\frac{\partial(x, y, z)}{\partial(r, \theta, \phi)} = r^2 \sin \theta$ となる⁴. よって求める体積は

$$\begin{aligned} \iiint_D 1 \cdot dx dy dz &= \iiint_E 1 \cdot |r^2 \sin \theta| dr d\theta d\phi \\ &= \int_0^R \left(\int_0^{2\pi} \left(\int_0^\pi r^2 \sin \theta d\theta \right) d\phi \right) dr \\ &= \int_0^R r^2 dr \int_0^\pi \sin \theta d\theta \int_0^{2\pi} d\phi \\ &= \frac{R^3}{3} \cdot 2 \cdot 2\pi = \frac{4}{3} \pi R^3. \end{aligned}$$



別解 (変数変換を用いない). 累次積分を用いて,

$$\begin{aligned} \iiint_D 1 \cdot dx dy dz &= \int_{-R}^R \left(\int_{-\sqrt{R^2-x^2}}^{\sqrt{R^2-x^2}} \left(\int_{-\sqrt{R^2-x^2-y^2}}^{\sqrt{R^2-x^2-y^2}} dz \right) dy \right) dx \\ &= \int_{-R}^R \left(\int_{-\sqrt{R^2-x^2}}^{\sqrt{R^2-x^2}} 2\sqrt{R^2-x^2-y^2} dy \right) dx \end{aligned}$$

ここで括弧の中の積分は半径 $\sqrt{R^2-x^2}$ の円板の面積なので, 上の式に続けて

$$= \int_{-R}^R \pi(R^2-x^2) dx = \pi \left[R^2x - \frac{x^3}{3} \right]_{-R}^R = \frac{4}{3} \pi R^3. \quad \blacksquare$$

⁴ヤコビ行列は $D\Phi = \begin{pmatrix} x_r & x_\theta & x_\phi \\ y_r & y_\theta & y_\phi \\ z_r & z_\theta & z_\phi \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sin \theta \cos \phi & r \cos \theta \cos \phi & -r \sin \theta \sin \phi \\ \sin \theta \sin \phi & r \cos \theta \sin \phi & r \sin \theta \cos \phi \\ \cos \theta & -r \sin \theta & 0 \end{pmatrix}$ となる.